朝の乗客

忠生小学校 六年

大塙 おおの
かえて

「成瀬く成瀬く」

ドアが開くといつものメンバーが現れた。

あ、あの人ここに来るかな。

やっぱり来た。この人のかばんいつもぶつかるとかね。

いつも通り私となり立ったのは、ハデな服に大きなかばんを持った女の人。

お、あの人は今日も席ゲット！

空いている席を一番にとるのはネクタイのまがったサラリーマン風のおじさん。今日も朝からつかれているように見える。

吊り革に手をのばして遊んでいるのは、プルルバッグを持った小学生くらいの姉弟。

今日も仲良いな。

横浜線で毎朝見かける人たちだ。

私は小学六年、受験生だ。夏休みに入ってから毎日、この電車で塾に通っている。

いつもと同じ朝だったのに、今日は何かが違う。

途中からベビーカーに乗った二才くらいの男の子とお母さんが乗って来た。その男の子はぎんぎん泣いていた。

ドアが閉まると泣き声はもっと大きく聞こえた。お母さんはもうしわけなさそうな顔をして、一生懸命なだめている。

大きいかばんの女の人は、じろりと男の子の方を見る。

気がつくともプルルバッグの姉弟はいなかった。

ネクタイのまがったおじさんは、何やかばんの中をこそこそとあさっている。

男の子はまだ泣いている。

おじさんはかばんの中から何かを出した。

!!

トウモロコシ!!

そのトウモロコシには、皮もひげもついていた。

教育長賞
大埜楓「朝の乗客」

まさにとれたてといった感じ。

おじさんは無表情でトウモロコシの皮をむいた。

そして男の子の方へ投げた。

え？ うそ!!

男の子は目を大きく開いて泣きやんだ。

トウモロコシは皮を羽にして飛んでいた。

まわりの人は目をパチパチさせている。

おじさんだけがニコニコと男の子の方を見ている。

トウモロコシはくるくるまわると、ポンポンとはじけた。

たちまち男の子の手の中はポップコーンでいっぱいになった。

男の子は不思議そうに手の中のポップコーンとおじさんの顔を交互に見てから、パクつとポップコーンを口に入れた。

男の子はポップコーンを笑顔で食べている。

おどろいて目を見開いて立っていたお母さんもほっとした顔になった。

次の駅に着くとおじさんはゆっくりと席を立て降りていった。

あれ？ おじさんここで降りちゃうんだ。

そこはおじさんがいつも降りる駅よりだいぶ手前だった。

次の日、私はまたいつもの電車に乗った。

「成瀬く成瀬く」

ドアが開くとおじさんの顔が目に飛び込んできた。

今日もネクタイがまがっている。そして一番に空いている席に座った。

大きいかばんの女の人は相変わらず私にぶつかってくる。

プールバッグの姉弟は今日もあきずに吊り革で遊んでいる。

昨日の出来事なんて何もなかったかのように…。

今日もいつも通り電車は走る。

おじさんはいったい何者なんだろう。

私は考えながら窓の外をながめる。

教育長賞
大埜楓「朝の乗客」

審査員講評

日常を舞台にした作品は細部の描写が具体的であるほど読み応えが増しますが、この作品には光る情景表現がみごとにちりばめられています。そしてそんなリアリティを大胆に打ち破る展開に意表をつかれ引き込まれます。最後にまた日常に戻るところも、現実と地続きに思えて嬉しくなりました。

—— 藤岡 みなみ